

## ポーの「黒猫」と『マクベス』 Poe's "The Black Cat" and *Macbeth*

松 阪 仁 伺\*  
MATSUSAKA Hitoshi

アメリカ文学者ポーは十九世紀を代表する文学者の一人である。その名声は英米におけるよりもむしろ外国において確立された。彼の天才を最初に見抜いたのは、ボードレールであり以後代表的なフランスの文人は例外なくポーの賞賛者であった。あるいはドイツや日本においても、その文学の卓越性は広く認められている。

しかし不思議なことに、その生地アメリカやイギリスにおいては、かれの文名はそれほど高くはない。これは大変に不思議なことである。その理由はいろいろあるはずだが、管見によれば、ポーの文学はいまだ英米において十分に理解されていないことだと思われる。ポーの文学は英米文学の傍流あるいは、英米文学という大陸からかけ離れた孤島であると信じられている。

本論はこういうポーに対する評価の是正を求めるものである。彼の文学はイギリス文学という豊饒な大地から生まれたことを立証することを目的とする。

「黒猫」はポーの代表的な短編であって、その優れた心理分析のゆえに精神分析的な視点で論じられることが通常であった。しかし、私見によればシェイクスピアの『マクベス』を耽読し、その文学的世界を取り込んで執筆したのが「黒猫」なのである。『マクベス』は魔女が支配する中世の世界であり、「黒猫」は十九世紀の平凡な市井の物語である。しかし、ポーはシェイクスピアの作品の本質をしっかりと受け継いでいる。マクベスをめぐる魔女とマクベス夫人の三者は特殊な相互依存関係にあり、それをポーは「黒猫」の主人公(=語り手)と黒猫と妻の三角関係に反映させている。それが「黒猫」が現代においても高く評価される要因であろう。

キーワード：ポー、猫、分身、マクベス、魔女

Key words : Poe, cat, double, Macbeth, witch

### I

夭折したアメリカ文学者エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe)とフランス詩人シャルル・ボードレール(Charles Baudelaire)の関係は文学史上の奇跡であった。偉大なフランス文学者のポーに対する心酔と傾倒こそが、ポーを十九世紀を代表する文豪に仕立て上げたといっても過言ではない。アメリカのみならずイギリスにおいても、ポーは異端児であった。というよりも、現在でも異端児であると言ってよかろう。英米においては、ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)やメルヴィル(Herman Melville)をはじめとする何人かのアメリカの文人は、文句なく偉大だと賞賛されているのに対して、ポーに対してはいまだに、疑惑の眼差しが向けられているように感じるのには、私だけの偏見とは言いきれまい。ポーの文学は英米文学の異端である、ポーは英米文学という大陸からはかけ離れた孤島であるという観念が牢固として存在する。あるいは、それは正当な評価ではないのでは

なかろうか。ポーの作品を読み返すたびに、そういう疑念がふくらむ。彼が目指したのはの夢幻の世界の創造であって、現実の世界からの断絶こそが彼の文学の本質であるという印象をもつ読者がおおい。そういう側面があることを否定するものではない。しかし、非常にデフォルメされてはいるが、十九世紀のアメリカの現実がしっかりと描き込まれている作品が少なからずある。十九世紀アメリカの現実に深く関わった文学者、アメリカ文化の批判者としてのポー文学というのは、未だに十分に開拓されていない分野でであろう。

さらには、英語文化圏に生まれ育った文学者として、彼もホーソーンやメルヴィルと同様に、イギリス文学という豊饒な土壌から豊かな養分を吸収したと考えるのが自然ではなかろうか。こういうパースペクティブから覗いた時に、新しいポーの姿が見えてくるのではあるまいか。これからのポー研究は、英米文学の正統との関係を見つめ直す必要があるはずである。優れた文学を産み出すのは、優れた伝統である。逆に言えば、卓越した芸術

\*兵庫教育大学(社会・言語教育学系)

作品は、ただ卓越した伝統のみから産み出される。これが健全な常識ではあるまいか。

さまざまなジャンルにおいて後世に多大な影響をあたえたポーであるが、その業績においてもっとも傑出しているのは、心の闇を透視する視線の鋭さである。またその炯眼に裏打ちされた散文作品である。彼は近代の人間が背負う運命と苦悩を、その短編に書きつづったのであった。ポーの優れた心理洞察は、早くから認められていて、そのために精神分析の見地からの研究をうながした。その嚆矢はフロイトの弟子、マリー・ボナパルテによる浩瀚なるポー研究である。<sup>1</sup> 最近では、またラカンなどの新しい心理学の潮流によって新たなポー像が産み出された。<sup>2</sup>

現代心理学の視点からの分析に耐えうるのは、ポーの文学の卓越性の証明であるし、その観点から明らかになった点は数おおい。しかし現代科学からだけの研究には限界があるのではなかろうか。ポーが受け継いだ遺産は考慮に入れなくてよいのであろうか。過去の伝統からの視点も重要なはずである。

本論はそういう前提に立脚して、シェイクスピアの『マクベス』にスポットライトを当てて、この悲劇と「黒猫」の関係を考察してみたい。このエリザベス朝の劇詩人は、英米文学の古典中の古典であるから、文学者を志したポーが知らなかったはずはない。『マクベス』とポーの「黒猫」には偶然とはけっして考えられない類似点が存在するし、それはポーの想像力の本質に迫る問題をはらんでいる。

最も重要な点は、主人公のマクベス、マクベス夫人、魔女の三者は個々独立した登場人物というよりも、マクベスを中心にした特殊な相互依存関係にあるキャラクターである。端的に言えば、魔女と夫人は主人公の分身であり、その分身たち同士が相互の依存関係にある。結果として『マクベス』は、近代的な心理劇ともなっている。ポーの「黒猫」には、この三者の関係が、語り手と黒猫と妻の関係に焼き直されている。

国籍も時代も異なる二人の文人が、同じ趣向の作品を執筆することは可能性の範囲内にあろう。しかしポーの場合にはやはりシェイクスピアの悲劇を耽読し、その強い影響下において「黒猫」を構想したのではないかと想像される。

## II

悲劇の幕があがるとすぐに、三人の魔女が登場して謎めいた言葉を口にする。注目すべきは魔女たちが、「ひきがえる」("Paddock") のみならず、「猫」("Graymalkin") にも言及して、猫と魔の世界とのつながりを暗示する。猫は、伝承によれば、魔女の「使い魔」

(familiar) なのである。「黒猫」においては猫は、「プルート」("Pluto") という冥府の支配者の名前をあたえられている。さらに迷信を信じる主人公の妻によれば、黒猫は姿を変えた魔女である。物語の後半部分では主人公は、猫の重みと吐息を感じつつ、「悪夢」("Night-Mare") にうなされて眠れぬ夜を過ごす。言葉の歴史をさかのぼれば、それは夢魔つまり睡眠中の人を窒息させる魔女をも意味する。

魔女たちがマクベスの運命を支配し破滅にいたらせる。ギリシア神話においては、人間の生命の糸を紡ぎ、その糸の長さを決めて、その糸を断ち切る三人の女神が人間の運命を支配しているが、魔女たちは神話のパロディであろうか。

荒地において魔女たちは、マクベスとバンクォーに謎めいた予言をして、その運命に暗い影を落とし始める。

**第一の魔女** よう戻られた、マクベス殿！お祝い申し上げますぞ、グラミスの領主様！

**第二の魔女** よう戻られた、マクベス殿！お祝い申し上げますぞ、コーダの領主様！

**第三の魔女** よう戻られた、マクベス殿！いずれは王ともなられるお方！

**バンクォー** どうしたのだ、なぜ驚く、これほどよい予言に、そのさまは？

**1Witch.** All hail, Macbeth! hail to thee, thane of Glamis!

**2Witch.** All hail, Macbeth! hail to thee, thane of Cawdor!

**3Witch.** All hail, Macbeth! that shalt be king hereafter.

**Banquo.** Good sir, why do you start, and seem to fear Things that do sound so fair? (1.3.48-51)

注目すべきは、マクベスの反応を描写するバンクォーの「驚く」("start") という言葉であろう。私の語感では「はっとした」とする方がマクベスの気持ちにより則している。それは、秘密を魔女に見破られたがゆえの驚きと恥ずかしさを表現する動作なのである。戦闘において獅子奮迅の活躍をして得意の絶頂にあったマクベスには、野望の炎が燃えはじめていた。悲劇の発端はここにあり、魔物はその心の間隙につけこんだのである。予言は曖昧でマクベスはとまどいを隠せない。

**マクベス** 待て、曖昧なことを言う奴らだ、もっと、はっきり言え。父のサイネルが死んでからは、なるほどグラミスの領主には違いない。だが、コーダとは？コーダの領主はまだ元気である、勢いも盛んだ、まして王になるなどとは、ますます信じられぬことだ。

**Macbeth.** Stay, you imperfect speakers, tell me more:

By Sinel's death I know I am thane of Glamis,

But how of Cawdor? the thane of Cawdor lives

A prosperous gentleman; and to be king  
Stands not within the prospect of belief,(1.3.70-74)

父の死によって、グラミスの領主であることは事実であったが、コーダの領主は存命であり、ましてや王になるなどとはあまりに意外であった。直後にコーダの死を知ったマクベスは、予言の二つが的中したことを知り、魔性のものが真実を語ったことに驚くとともに、王になるという予言の可能性を信じ始める。

これは悪魔の誘惑の巧みな点であって、悪魔はすぐにはれる嘘、あるいは百パーセントの嘘はつかない。嘘に真実を巧妙に織り込むことによって、人間をたぶらかすのが常套手段である。王位篡奪という黒い野望に魔女がつけこんできたのである。ある意味では主人公の心の闇が魔女を生み出したといっても過言ではない。魔女は主人公の心の反映であるがゆえに、その影でありダブルだという解釈も成立するはずである。

これは伝統的な悪魔観を踏まえている。悪魔は心の闇に潜んでいるのである。新約聖書において悪魔がもっとも精彩をはなつのは、イエスの誘惑の場面であろう。誘惑されるのは荒野であるが、実際の舞台はむしろ救世主の内面風景なのである。悪魔との対話は、イエス自身の内的な対話なのである。

悪魔の誘惑の巧みなのは、「もしあなたが神の子であるなら」と問いかけることである。直前にイエスはヨハネから洗礼を受けて、その時に天から「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなる者である」という声が響いたのであった。これはイエスにとって、得意の絶頂の瞬間であった。

しかし本当に自分は神の子であるのかという疑念に、悪魔は鋭く切り込んできたと解釈できる。悪魔の三つの誘惑は、イエスが実際に伝道をおこなった際に体験した葛藤を先取りしたものであると言われる。イエスの誘惑とおなじ心理性が、マクベスと魔女の関係にも反映している。

『マクベス』は激しい心理的葛藤のドラマである。その引き金となるのは、戦争を勝利に導く大活躍ゆえの得意であり、結果として勃然として起こった野心である。その非望ゆえに魔女の予言に心動かされたのであった。

マクベスは野望に燃えてはいるが、それを直線的に行動に結びつけるタイプの人間ではない。彼は逡巡し懊悩する、ある意味では近代的な人間である。その心の一面、黒い野心はかれの妻がひきうけることになる。妻はマクベスの影であり、姿を変えた魔女である。

マクベスは、手紙で魔女の予言について語る。野心と懦弱の間で揺れ動いていることを察知した夫人は、野心を突き動かすのが自らの役割であると決意する。野望の翼を縛っているのは、夫人の言葉を借りれば、「ミルクの

ごとき情愛》("th'milk of human kindness")である。同様に「黒猫」の主人公の生来の資質は「人間らしい感情》("humanity of feeling")である。夫人は、大事において意気阻喪せぬように、女でなくして欲しいと魔性のものに祈る。むしろ、魔性のものへの変身を決意する。

夫人 さあ、血みどろのたくらみごとに手を貸す悪霊たち、私を女でなくしておくれ、頭の天辺から爪先まで、恐ろしい残忍な心でいっぱいにしておくれ！この血をこごらせ、優しい情けの通い路をふさいでおくれ、押寄せる悔いの重荷に、この酷たらしい心がぐらつき、弱々しく潰え去ったりしないように！さあ、人殺しの手先ども、このふくよかな女の胸に忍び込み、甘い乳を苦い胆汁に変えてしまっておくれ

Lady M. Come, you spirits  
That tend on mortal thoughts, unsex me here,  
And fill me, from the clown to the toe, top-full  
of direst cruelty! make thick my blood,  
Stop up th'access and passage to remorse,  
That no compunctious visitings of nature  
Shake my fell purpose, nor keep peace between  
Th'effect and it! Come to my woman's breast,  
And take my milk for gall, you murd'ring ministers,  
(1.5.39-47)

何とも恐ろしい言葉であって、天才劇作家の想像力に圧倒される。最後の行に注目しよう。夫人は甘い「ミルク」を苦い「胆汁》("gall")に変えてくれと祈る。「ミルクのごとき情愛」は夫人が元来もっていた資質でもあったはずだ。ダンカン(Duncan)王を城に迎え、非望を成就する千載一遇にめぐまれながらも、マクベスの心は揺れ動く。その逡巡する心を叱咤激励するのが夫人の役目である。男になればと迫る夫人は鬼気迫る形相をしていたはずである。

夫人 では、今まで身につけていらした望みは、ただ酒のうえのこととでも？そのあとで一眠りして、いま目がさめてみると、さっきは平然と見据えられたものが、今度はちらと垣間見ただけで、ぞっとして気が沈むとおっしゃる？解りました、私への愛情もそんな頼りないものなのでしょう。考えていらっしゃる御自分と、思いきった行動をなさる御自分と、その二つが一緒になるのを恐れておいでなのですね？ひそかにこの世の宝とお思いになり、それがほしくてたまらぬ方が、われから御自分を臆病者と思いなし、魚は食いたい、脚は濡らしたくないの猫そっくり、「やっつてのけるぞ」の口の下から「やっぱり、だめだ」の腰くだけ、そうして一生をだらだらとお過ごしになるおつもり？

マクベス お願いだ、黙っていてくれ、男にふさわしいことなら、何でもやってのけよう、それも度がすぎれば、もう男ではない、人間ではない。

夫人 それなら、このたくらみをお打ち明けになったときは、どんな獣に唆されたとおっしゃいます？

**Lady M.** Was the hope drunk  
Wherein you dressed yourself? hath it slept since?  
And wakes it now, to look so green and pale  
At what it did so freely? From this time  
Such I account thy love. Art thou afraid  
To be the same in thine own act and valour  
As thou art in desire? Wouldst thou have that  
Which thou esteem'st the ornament of life,  
And live a coward in thine own esteem,  
Letting 'I dare not' wait upon 'I would',  
Like the poor cat 't'hadage?

**Macbeth.** Prithee, peace:  
I dare do all that may become a man;  
Who dares do more, is none.

**Lady M.** What beast was't then  
That made you break this enterprise to me? (1.7.35-45)

マクベスの心は、「やってのけるぞ」("I would")と「やっぱり、だめだ」("I dare not"), 野心と懦弱の間を揺れ動いている。「哀れな猫」云々というのは、The cat would eat fish but would not wet her feet.という諺を下敷きにして、「魚は食いたい、脚は濡らしたくない猫」というのは、まさにマクベスの葛藤をコミカルに表現している。夫人は「このたくらみをお打ち明けになったときは、どんな獣に唆された」にある「獣」("beast")にも注目してみたい。直前に猫に言及した夫人の脳裏には猫のイメージがあったはずである。ポーの「黒猫」においては猫はしばしばbeastと形容されている。

この部分のマクベス夫人の描写には、悲劇の劈頭の魔女と、さらには猫の暗い不吉なイメージが焼き重ねられている。魔女と夫人には重なる部分があると言ってよかろう。あるいは、魔女と猫と夫人は悪の三位一体を構成している。

配偶者を、妻の場合がおおいようであるが、「ベターハーフ」(better half)と呼ぶのは、夫婦は一体であって相互に補完する関係にあることを表現している。妻は、ある意味では夫にとっては、影であり分身(ダブル)であるといっても過言ではなからう。夫人の場合にはマクベスの「ビターハーフ」(bitter half)と呼ぶようがより正確であろう。これはベターハーフのパロディであって、「災君、苦妻」の意味だとされる。

こうして劇の冒頭においては、夫人と魔女たちは主人公のマクベスと特別な依存関係、トランスパーソナルな

関係にあることは確かである。彼女たちは、マクベスの影の役割を担っている。しかし、その役割は劇の進行とともに変化し、薄まっていく。徐々に主人公とは無関係な、独立したキャラクターに変貌していく。

マクベスは劇の冒頭においては、将軍らしからぬ怯弱で優柔不断な男として描かれていて、夫人の叱咤によってやっと殺害を決意する。しかし、劇の進行とともにマクベスは夫人が望んだとおりの決然とした武人に生まれ変わる。その主な原因は魔女の予言である。

4幕1場の洞窟の場面で、マクベスは三人の魔女に再会する。魔女たちは三つの幻影を見せた後に、謎めいた予言をする。注意すべきは、「女の産み落とした者で、マクベスを倒すものはいない」あるいは「バーナムの森が動いて攻め寄せるまでは、マクベスは決して滅びることはない」という予言である。魔女たちの言葉におおいに勇気づけられて、マクベスは大胆な行動を躊躇なく実行する。

しかしそれに反比例してマクベス夫人は気弱な面を見せ始める。

夫人 まだ血の臭いがする。アラビアの香料をみんな振りかけても、この小さな手に甘い香りを添えることは出来はしない。ああ！ああ！ああ！

侍医 なんという溜息だ！心の重荷がそのまま伝わるような。

侍女 たとえどのような位をもらったからといって、この胸のうちにあんな重い心を持ちたくはない。

**Lady M.** Here's the smell of the blood still: all the perfumes of Arabia will not sweeten this littel hand.  
Oh! oh! oh!

**Doctor.** What a sigh is there! The heart is sorely charged

**Gentlewoman.** I would not have such a heart in my bosom, for the dignity of the whole body. (5.1.49-53)

夫人は物語の冒頭でみせた大胆さを失い、良心の呵責に耐えきれずに正気を失ってしまう。この夫人の弱気は、あのマクベスを叱咤激励した鬼のような言葉からは到底想像しがたいものである。観客には、受け入れがたい変貌であるとも言えよう。もっとも、前に注意を喚起しておいたように夫人は元来が、ミルクに象徴される優しい女性であったことを思えば、それほど不自然とは言えない。劇の前半と後半で、夫婦はその人格を逆転させる。強気と弱気、野望と良心、善と悪は入れ替わってしまう。

あるいは、夫人の変化はマクベスとの関係を考慮に入れて初めて理解できるように計算されているのかも知れない。夫人はマクベスの影を担っていると解釈すべきかもしれない。前半においてはマクベスの隠された野心を、

後半においてはマクベスの胸に秘められた良心の呵責を表現する役割が夫人に与えられているのである。夫人はマクベスの分身であり、夫婦で一人の人間の人格を形成していると解釈できる。

ポーがシェイクスピアから触発されたのは、心理的葛藤を表現する方法、ほかの登場人物との関係によって、心理的軛轡を表現するテクニックであった。魔女と夫人とマクベスの関係は、黒猫と妻と語り手の関係に対応している。『マクベス』と同様に「黒猫」は主人公の魂をめぐる善と悪の闘争のドラマである。

主人公は元来が情愛の深い優しい人間であった。彼と妻は、墮落前のアダムとイブのごとくに、ペットの動物たちとの愛情に溢れた平和な共存の状態にあった。黒猫は最愛のペットにすぎなかった。楽園は主人公の墮落によって崩壊してしまう。彼の言葉を借りれば、「飲酒という悪魔」("the Fiend Intemperance") の出現により、家庭の平安は崩壊してしまう。

善悪の相争うドラマにおいて、妻は主人公のダブルであろう。夫婦は元来「人間らしい感情」("humanity of feeling") を共有していた。それは主人公が墮落した後も、変わることなく心の奥底でもちつづけている天性である。従順なる妻は主人公の内面の一部を代表しているのである。ただ、マクベス夫人とは異なり、主人公の妻の役割は変化することはない。彼女は、主人公の優しい情愛、あるいは良心そのものである。

「黒猫」は善悪をめぐる心理的葛藤のドラマである。それは主人公と妻の関係に如実に表現されている。これはダブルの文学の典型的な主題である。しかし「黒猫」は、それだけでは捕らえきれない複雑な奥行をもっていることにも着目しなければならない。黒猫は変身した魔女であって、悪の象徴であることは事実である。しかし原作の『マクベス』とは異なり、ポーの短編においては黒猫と主人公の関係は単なる善悪のドラマの次元を超越している。

問題は墮落を契機にして、主人公の心に亀裂が生じてしまったことである。水田宗子によると、黒猫は心に内在する根源的な「他者」である。

猫の目が自己との幸福な関係を打破り、他者を出現させる。猫が主人公を "さけたと思った" と言うことは、主人公が猫を他者として意識したということである。猫はもはや "利己的でない" 動物でもなく、自己犠牲的な存在でもなく、敵意に満ち、しかも主人公を邪悪な存在と感じる他者である。親密な、内的な猫との関係は自己と他者の敵対関係に変わってしまう。<sup>3</sup>

主人公がなによりも望むのは、心の平安であり幸福な一体感である。彼が蛇蝎のごとくに忌み嫌うのは内的

な葛藤であり、心理的軛轡である。それは彼にとっては善悪という問題と同じく重要であった。物語のプロットを推進させる原動力はそこに存在する。主人公がペットの動物たちを愛するのは、独立した別個の「他者」としてではなく、自我の延長としてであって、自己愛の一種である。その意味では、彼と妻の関係も同じであって、彼は妻を独立した自我をもった人格として愛しているのではない。これはポーの作品における人間関係の特徴であって、その意味では水田の「大体において、人間と人間との関係はポーの作品に見ることはできない」というのは鋭い指摘である。しかし、猫は単に「他者」の象徴のみではないというのが、私の意見である。黒猫は心の中の異邦人、主人公の心の平安を乱し、切なる願いを阻む「異物」なのである。

猫の殺害というのは、物語の重要な節目であり転換点である。二つの点に注目してみたい。一つはこの罪の行為の意味である。いま一つは、語り手自身は決して明らかにはしないが、猫殺害の秘められた動機である。

注目すべきは、これが激情に駆られた結果としての罪ではないことだ。恐ろしい罪を犯していることを十分に認識しつつ行った悪事であることだ。彼は、この行為が「許されざる罪」であることをしっかりと認識している。悪魔に身を売り渡すにも等しい行為であることを知っていたのである。それゆえにこの事件は主人公の悪への傾斜の決定的な一步であったと解釈できる。今や、悪魔こそが彼の仕えるべき主人となったのである。

そうすることによって罪を——もしそのようなことがあり得るとすれば——わたしの不滅の靈魂を、限りなく恵み深く限りなく畏ろしい神の無限の慈悲すら及ばぬ彼方へ、墮し入れる恐ろしい罪を——犯していることが分かっていたがゆえに、縛り首にしたのだ。

...I knew that in so doing I was committing a sin—a deadly sin that would so jeopardise my immortal soul as to place it—if such thing were possible—even beyond the reach of the infinite mercy of the Most Merciful and Most Terrible God.(852)

同時代のホーソーやメルヴィルとは相違して、ポーはキリスト教とは無縁というか、彼の想像力は宗教的な倫理性を超えていると一般的に信じられている。しかし、引用の文章を読めば、そういう見解は少なくとも部分的には修正せねばならないと思われる。

それはポーという独創的な作家といえども、キリスト教という強力な磁場から逃れることは不可能なことだ。あるいはポーが描いている悪夢の世界は、キリスト教という大伽藍が崩壊した西欧社会の悲惨であろう。ポーはキリスト教がパロディとしてしか、機能しなくなった

世界を描いているのだと、私などは信じている。

悪逆の行為の動機を、語り手自身は説明することはない。むしろ彼は責任を回避して、それを「天の邪鬼の精神」("spirit of perverseness")のせいにしてしまう。

つまりこの天の邪鬼の精神が、わたしにとって身の破滅となったのだ。罪もない動物に加えた危害をさらに続けさせ、ついには極点にまで達せしめたのは、自らをさいなみ——自らの本性をしいたげ——悪業のために悪業をなそうという、この測りがたい魂の欲求であった。

This spirit of perverseness, I say, came to my final overthrow. It was this unfathomable longing of the soul *to vex itself*—to offer violence to its own nature—to do wrong for the wrong's sake only—that urged me to continue and finally to consummate the injury I had inflicted upon the unoffending brute. (852)

人間の魂の最深部には不条理と悪魔的なものが存在する。致命的であると知りつつ、あるいは知っているからこそ悪事に駆り立てる不気味なものが、心の深淵に存在する。これがポーの基本的な人間観のようだ。キリスト教における悪魔を近代的に心理学的に表現したのが「天の邪鬼の精神」と言えるかもしれない。猫の殺害は、主人公の主張するように、究極的には人知を超えたもの、人間に悪意をもって破滅に追い込む存在の仕業であるかも知れない。しかし、語り手は本心を暴露していないことも確かである。猫の殺害には充分な動機が存在するのではなからうか。

悪魔に身を売り渡すことのメリットとは、それによって善悪の葛藤を帳消しにすることであり、良心の呵責から逃れることにあったのではなからうか。この点では確かに黒猫は、水田宗子が主張するように「主人公を邪悪な存在とを感じる他者」である。片目を失った無惨な猫の姿は、残酷な罪の行為の証拠であって、彼の良心に痛みをあたえる。猫を抹殺してしまえば、この苦しみから逃れることができる。それが彼の心の安定を回復するための、誤ったそして安易な方策である。黒猫はそういう意味での、心の平安を乱す異物である。しかし黒猫は多分それ以上の存在である。

上の引用に典型的に見られるように、ポーにおいて特徴的であるのは、心や魂を言う場合に、soulという言葉を用いることである。この言葉は語源をさかのぼると「海」に関係する単語である。重要なことはポーが人間の心を、海のごとくに不気味で人知のおよばぬ世界であると考えていたことである。

そして黒猫は、この理性では測りがたい世界のシンボルでもある。この語り手(主人公)の特徴は、素朴なる理性主義者であることだ。それは彼の言葉に端々に感じ

取れる。冒頭では、この怪奇な物語も、高度な知性を備えた人間にとっては「一続きの自然な因果関係」("an ordinary succession of very natural causes and effects") (850)にすぎない、と語られる。彼は理性という小島に閉じこもって、心の暗黒の海に目を閉ざしているのである。そういう人間には、魂は不気味な異邦人として立ち現れるのは必然である。猫は自らの心の中の他者でもある。現代風に言えば無意識である。

であるから黒猫の殺害というのは、無意識の殺害でもあった。無論、無意識を殺害できるはずはないのであるから、これはただ象徴的な行為にすぎない。この根底には、意識あるいは理性こそが、心の主人公であるとする十八世紀以降の西洋の理性信仰があるはずだ。であるから、猫の殺害は現代人の傲慢をシンボリックに表現した行為とも解釈できる。彼の最大の過ちは、理性や意識が心の主人公であって、その独裁的な意志によって心の王国を支配できるとする信念であろう。そういう理性信仰こそが、主人公の宿痾なのである。しかしそれは土台不可能なことであるので、また黒猫が別の姿で現れることは必然である。猫の殺害は、それ以降の主人公の心における、意識と無意識、理性と感情の歪んだ関係の象徴的表現である。意識と無意識は断絶してしまい、正しい関係を取り結ぶことは不可能となる。意識は排除したはずの無意識に無言の圧力を感じることとなる。

これは頭にのしかかる猫というイメージが繰り返されることによって表現されている。例えば、ブルートの代わりとなる猫は、酒場の「ジンの大樽の頭の上に」("upon the head of one of the immense hogsheds of Gin") (854)に座っていたと表現される。注意を喚起したいのは、「頭」headを二度も繰り返して強調していることである。さらには、最後に妻の死体の頭の上ののっていたのも猫であった。頭は理性や意識のシンボルであるから、これはの理性にのしかかる重みと解釈すべきであろう。

「黒猫」の主人公の本性は、妻の死骸を壁に塗り込めるという行為と、その露見に典型的にあらわれている。彼にとっては死体を秘密の場所に封じ込めることは、意識の外に排除することである。彼にとっては、意識に存在しないものは存在しないのである。それゆえに、つかの間のそして偽りの心の平安を獲得することはできる。しかし、それは結局は猫の出現によって裏切られざるえない。

黒猫の殺害と家の焼失は、物語の転換点であって、読者は物語のトーンが変化したことに気づかざるをえない。読者は、小説の世界からロマンスの世界へと迷いこんだという印象をもつ。日常世界は超自然の世界に変貌してしまう。例えば、妻の死骸とともに黒猫を掘り出すエピソードなどは、現実世界の記述としては受け入れがたい。

境界の曖昧性が「黒猫」の世界の特徴である。それは超自然と交流する世界、超自然に開かれた夢幻境である。この点においても、ポーはシェイクスピアに学んでのではないかと推察される。

後半の洞窟の場面（4幕1場）において、魔女たちはマクベスに次々とまぼろしを見せる。これは悪魔が伝統的にもっていると言われる能力である。さらにはこの場面にとどまらず、マクベスは何回か幻影を見る。ダンカン王殺害の夢にふけるマクベスに、柄を握れとばかりの風情で短剣のまぼろしがあらわれる。

**マクベス** 短剣ではないか、そこに見えるのは、手にとれと言わんばかりに？よし、掴んでやる、掴めない、目に見えるのだが。忌まわしい幻め、見えても、手には触れぬのか？熱に犯された頭が造りあげた幻覚にすぎぬというのか？

**Macbeth** Is this a dagger which I see before me,  
The handle toward my hand? Come, let me clutch thee:  
I have thee not, and yet I see thee still.  
Art thou not, fatal vision, sensible  
To feeling as to sight? or art thou but  
A dagger of the mind, a false creation,  
Proceeding from the heat-oppressed brain? (2.1.33-39)

私の感じるのは、短剣は主人公の妄想が生み出したのか、あるいは魔女の仕業であるのかという疑問である。マクベス自身はむしろ近代的な解釈に傾いている。が、魔女が幻影を見せているのだという解釈は不可能ではない。というか、それを言下に否定することは不可能であろう。しかし、悪魔か妄想かというのは、同じコインの裏表とも言える。悪魔の住処は畢竟、人間の魂であろう。マクベスが見る幻影の例はもう一つあって、それは暗殺を命じたバンクォーの幽霊である。かれの罪悪感が幻影を生み出したのである。つまりマクベスの世界は、現実と妄想、事実と幻影が交錯する世界、その境界が曖昧な世界である。「黒猫」の場合には、十九世紀の平凡な市井の物語であるために、作者は幻覚を自然なものにする工夫を忘れていない。それは語り手が物語の冒頭で暗示する自らの狂気である。

### III

『マクベス』は神の光の消失した世界である。魔性のものが跳梁跋扈する暗黒の世界である。マクベスの悲劇をあやつるのは魔女たちであり、神の存在感は希薄というかほとんど感じることはできない。王位篡奪という悪事は罰せられて、正義と秩序は回復される。しかし、それは世俗の次元のことにすぎず、劇の最後で神の正義が

復活するというわけではない。

『マクベス』の暗黒の世界は、十九世紀の人間がおかれた状況そのものではなからうか。キリスト教信仰が決定的に揺らぎはじめるのが十九世紀以降の西欧世界である。ニーチェによれば「神は死んだ」のである。しかし、神の死は宣言されても、悪魔の死は宣言されたことはない。これは奇妙なことであるまいか。

キリスト教はゾロアスター教のごとき善悪二元論の宗教ではない。善と悪は同じ実在性をもっているわけではなく、悪魔は神の従属物にすぎない。キリスト教においては、神こそが至高の権力者であり、その神が死ねば、神の影たる悪魔は死滅するはずである。しかし事実は全く逆であって、悪魔は脇役から主役への階段を駆けのぼり、王位を篡奪したのである。それが十九世紀以降の西欧が置かれた精神的状況であろう。十九世紀の人間が置かれた悲惨な状況を、『マクベス』という悲劇は先取りしているのではあるまいか。

ドッペルゲンガー（ダブル）あるいは二重人格というのは、西欧社会においては十九世紀以降において顕著な現象である。ドストエフスキーの『二重人格』、ステューブンソンの（Robert Louis Stevenson）『ジキル博士とハイド氏』（*Dr. Jekyll and Mr. Hyde*）、オスカー・ワイルド（Oscar Wilde）の『ドリアン・グレイの肖像』（*The Picture of Dorian Gray*）などの傑作とされるダブルの文学は十九世紀に特有の現象である。その最大の理由は、やはり「神の死」につきるのではなからうか。

人格の分裂というのは、これは人間の宿命であって、なにか特殊な人のかかる病気ではない。創世記によると、アダムとイブの犯した罪は「善悪の知識の樹木」の果実を食べたことであった。善悪を知ったということは、あるべき規範としての善、そして自らの心その規範とは完全には一致しないことを知ったのである。それ以来、人間の心は善と悪の相争う戦場であった。表現をかえれば、それは霊と肉、社会的自我と本能的自我の葛藤であろう。こういう意味では、心の分裂というのは、人間の本质であって、われわれが日常に体験することでもある。

内なる善と悪、二つの対立する自我があまりに距離をへだててしまい、双方が独立の人格を備えるときに、人格の異常が発生する。あるいはそのときに初めて「ダブル」をテーマとする近代文学が産まれたのである。

人格の分裂は人間の運命ではあるが、そういう葛藤を避けたいという願望、完全なる分裂を回避して、なんとか人格の統一性を保ちたいというのも人間の宿願である。それはキリスト教世界においては、キリストを仲介者として、神との繋がりを模索する努力において果たされるのではなからうか。みずからの心の中に楽園を回復させることによってである。そういう意味で、西欧の精神史において「神の死」というのは決定的な出来事であった

に違いない。ポーの短編作品もそういう文脈で読まれるべきであろう。

「黒猫」が優れた文学であるのは、善悪の葛藤というテーマを新たに方向に展開した点にあらう。それは意識と無意識、男性原理と女性原理の不幸な関係であり亀裂である。これは、管見によれば極めてアメリカ的な現象である。アメリカ文化そして一般的にキリスト教文化はあまりに男性的要素が優勢すぎる。それはあまりに理性的で意識的に過ぎるといふ欠点であって、「黒猫」はそういうアメリカ文化の告発の文学でもあらう。意識と無意識の断絶と歪んだ関係といふのは、ポーのほかの短編の主題でもある。

### 注

「黒猫」からの引用は、下記の版による。引用の後にページ数のみを記す。

Thomas Olive Mabbott (ed.), *Tales and Sketches 1843-1849: Collected Works of Edgar Allan Poe, Volume III* (Cambridge: Belknap Press, 1978).

日本語訳については、河野一郎氏の訳を参照させていただいた。河野一郎（訳）「黒猫」『ポオ全集：2』（東京創元社、1983年）。

『マクベス』からの引用は、下記の版による。John Dover Wilson (ed.), *Macbeth* (The New Shakespeare; Cambridge: Cambridge University Press, 1947).

日本語訳は福田恆存氏の訳を利用させていただいた。『マクベス』（新潮文庫、昭和44年）。

1. Marie Bonaparte, *The Life and Works of Edgar Allan Poe: A Psycho-Analytic Interpretation* (London: The Hogarth Press, 1949).

2. John P. Muller and William J. Richardson (eds.), *The Purloined Poe: Lacan, Derrida, and Psychoanalytic Reading*, (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1988).

3. 水田宗子, 『エドガー・アラン・ポオの世界：罪と夢』（東京：南雲堂、1982）、114頁。